



茶の心

冊

本間文庫
文庫 14
A 20



№44



新刊 中央書庫



風俗文集下の巻 自隨庵著

解出雲の説

中世の辨

夏曆の賦

風俗集刊 徳本 百景作

美多子

作者ヨシト

三好徳庵著

山崎 女客集 三巻

樽屋 せん

山崎 茂左

山崎 六三郎

山崎 源五郎

櫻 碓 七のり

美のあ

山崎 五代門柳 櫻

長 唄

多子 明の鐘 高尾 榎城 初子の 母景清

後撰夷曲集
傾城色三味線

送の下田長と短と
新と腰上頂上の不夜
花并のあつた
ほつた散りし名九里の
まはるけい舞の三五の目

女魔の積

續万代狂歌集

翼太勺集

長明
敷入娘
浦吉の帰航

月雪を待たせの危
乱苗仲意重

藤神楽
初流る雲倉雀
了々々々々

八州梅の畏霜日
面和佳歌跡

傾城館の序

旗の系

廊意に子地
風伝文集
春草集序の序

常盤集
女系木抄の頭

両顔月夜吟
恋身守初音の旅

ハ文字也

式亭之馬

自 衆作
高 元有撰

梓屋之記述
六 易 述

榎田 左文

榎田 左文

遠撰子文

山東 京傳
御園 くら

丁迄巻一九
自隨落庵北華

本村三つ小
初森 又助

中 字名 敷 靴
 花 紋 日 形
 其 終 旅 路 の 嫁
 世 間 娘
 四季 王 海 井 井
 廓 安 前 序
 狂 歌 上 段 井 井
 櫻 花 文 庫 の 序
 百 鳥 の 歌
 川 傍 の 歌

中 右 吉 助
 瀬 川 水 車
 櫻 田 信 助
 其 左 文 文
 其 右 積 文
 白 鳥 東 魚
 蓮 葉 山
 赤 松 金 船

世女宿集 卷之一

戀のやいふふのふ園

室津まのりふの男あは

まれ海まづら子宝舟の浪枕室津まのりふは了大深ふと愛子酒つ
 らぬ高くと和泉清たつとふあの家来そ島よ不足うく然
 男子は湯子即とそ自血と生れつすてあつと男とふくし纏
 子増と其つ子いこく女的好り月俗十四の秋と色道
 子身とふし此はれ遊子少千人有しをいれつあふとそ
 誓紙千条とつと成と手相子あふと切せし思後大綱子
 ちとふし是とそ人子深とあつとふと一毎長届ふ
 つの山とふし故はれ送と少袖具まふと一と縁捨し三倉川の
 娘と是とそと成とふとふと舞橋の古の屋と移うらむ成
 まれ浮世花と戸前と書はてつと置と此とけいれ世

わつとて語り追付助当帳へ付けてまき上りて見ると是を
歎きしやちをのりて此道其比にまき上りて女郎と相
馴たりしをいふに命を極て人のいふに世の取沙はるんを
思ひし月夜に灯籠を昼とてさそを敷の立りよこし籠
肩のふい國をちりて取しにのりて大鼓枘をあし
らつとて者たのり伯子は蝙蝠の鳴る約ちを午に門をを積
せし教念佛を申死せぬの久る即ぐりてとて若菜の棚
を祭陽枝をわしとて送る大の影夜宿す程のころとまづ
くして後世思の國へ行く程嶋を家内のあまび女郎と名
をいふ無理な帷子ののりて肌ね見をちりて中へ吉
崎とて了すナカ女郎年月うくしまてし腰骨は白るをいふ見
けし生るるれ無天孫とて申おに魚窟る其針糸
やつる程に後世牙はまきけていふにのりて

清十郎親父腹をく成此宿にうらぬ入見よとて俄目荷を
のりて開開しるるを是を焚もをまき程にやしとて
説くも聞かぬ角にすまじりて之を暇申してさそを
うらぬるるる川で始を女郎泣出しけりてあまらるる太
鼓枘の中を開れ夜の泣きとてふれさそをうらぬ男の裸の
百貫しりてていふに世に清十郎様すまじりてふりて
此中にもさそを丹を者よとて又酒を呑みさそを
てさそをさそを楊屋にさそを見をて手取も及るてさ吸
物の土時林に茶のものとて雨の午に天目にてさそは
は由火の灯心にてさそを女郎とていふに字もさそを
替えき宿のふりて人の情を一歩十割あまらるる川
の身もさそをさそをさそをさそをさそをさそを
清十郎とて惜しむるに言葉も命にすまじりてさそを

わづら声を聞あひしをよのしるし命は物種此悲首のつて
いふびきあつてその心は通ひ路は見妬の関を揺る毎夜
のよて油断する中戸をさし火月心をさしあつた車の音神
鳴るるさかろ

三 太鼓のこゝろ 狝る舞

こゝろ業は少袖幕の中をうらむ

屋上の様はて人の事の中をうらむ 自慢色は娘の母の親ひ
こゝろを花に見すは見はし行は月の世の人心を
我ももむの若草すしうすのこゝろ花はさくづきを
海原静は日ぬく 〇袖をあひひけは花は衆は膝山吹
いふんとさもふは是る少袖幕の内をうらむ 眼をさして
帰らんものと忘れ樽の酒を酔人ふれしは美し
ぶらぶらと此中をうらむの者も人とぬしごと

あふつは見ずは得幕は跡は虫達のうらむをすしは
風情は袖枕取れし帯はさるるを其すしはあつた
ぬきは少袖をついては物陰はうらむ 〇中斷心
うらむは少袖の首尾はうらむと氣のうらむは所女房はうらむ
まじりすいさむ

四 伏箱の夜は四具を床に置

心首の世帯大はうらむをすしは

思ひのの旅用意伊勢参宮のうらむ 〇大坂の小道具賣は
うらむは具屋醍醐の法衣高山の茶屋は舟波の政屋
うらむは京の屋敷屋麻崎は言はた十人ふれは丁国の有衆店
舟はうらむ

先五十日ころの夜書ふは願はうらむは
彼七百両の金子置祈うらむは車長持はうらむは
物な念を

入る事と子細く親交に申す

五 命のいのちのさう白雨ののび

遠目村の里に迄二人の舟を流し是を感の新門舟
てつとてせむとてのそ 泡のつるらふとある

卷之貳

善子位輪の井戸替

身のいづれとて思いつきや無常の秋子細工の桶は道々世々
ての業と雖のこころのせし 船屑の煙はうら難は
のあはれ屋をうらと天満より野の任ふす男はと女も何し
片里の者としすかて耳の根白く足もつらふもはハ十四の大
晦の子親直の申年貢三分一銀さしつらと棟とて町家

日腰とつひと月りやうは秋の自然とオ高きまはけし倍は
一の心づきの奥庭の葉とては ながさすの人のうらな

折すは秋のくされさる 磯女に借小袖をいませはまてし
かたきとせむとせし せつとんとてまよひてはのそら
有るは教ありし 葉のくさ下はしり 唐風柱様
のいのちのさう横所へ借屋も 寔俊はいつてまかま
屋の井戸替りてまよはくはし 浮ぬたうのそら 眞妙の
針のさうまあはれしの是は何もさうししはな
つらん一代の茶の義は我まのつけまはさしと人かまの
まはぬは世は感跌とて大づのそらとけあふのさ
二 踊らるる桶夜更に何物かまらるる蓋とて見まぬ心有

東窓とあるところ隣に大打石の音赤子泣出し紙帳とある夜に
すゝ海流し牧草をこゝろと追耕、二布の蚤も片白に佛
棚もこゝろと錢を取申しつゝた葉買を物の子とせし世に
中より夫婦のくゝいひと樂し南枕に寐遊しゝゝゝゝゝゝゝゝ
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
朝のうらやけ秋の月やまをまゝる程吹しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
古の夢猶の底も紅の紙付けし紫の草むび一足つゝ
の珠散袋此中より時々の暇のばあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
栴此ニ色をせんは形見をそゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三京の水もいふ中忍と右釘目作の羅紙は書けり有
かゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
宿入のふやで番手と周房れ月移るゝゝ

てし首のしと眼は

奥のやゝと思ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
名敷のし大美もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たの稱前の前藤お森のよゆゝ茶の錢と銘ゝ栴のゝゝゝ

四のけゝ胸れゝゝゝゝ新世帯心正直の佃天玉満月有
五水屠れ松楊枝一サえれた下らんま道自と了夜有
あゝゝ女は白あゝのやんと白ひりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

卷之考

一安の関守京の高條のいゝゝゝゝ花見
天和二年の曆正月廿六日書初島より一日姫とて相代の日

... 又三三三女の本物... 手紙... 着て其う...
... 月... 恥... 羽織の...
... 紫の... 有...
... 髪... 櫛...
... 独...
... 面道...
... 女... 物...
... 其女の...
... 其跡... 花車...
... 羽取... 故... 唐...
... 島田... 附...
... 置... 四... 紐...

顔自慢... 中... 是...
... 下...
... 跡...
... 折...
... 孔雀...
... 紙...
... 持...
... 計...
... 見...

のさ息や后少所と云様を行花れ色見するに我れいり物と
後子思ひあせ行く

こまをかくるを枕の愛矢すも思ひは燃ゆる

男世も氣さんどる物あるにサ内義のふり夕着一に淋し
よ妾に大怪物れ何のし年久くごもを住せし柳より物
好の女もろよ形すれを望まむにけしけし後のはを
身と字草のちを尋ねて后少所とく娘をのし思ふも
いよ思ひま四条に園あり是とくくし思ふも勝を
首乗るやさしき人其れもあはれも人のいふに嫁に
坂つらむ我れいり

三人をさる湖死せぬ衣懐ち

世もろもろ情の道と源氏に書跡に妾を夕の園に
と柳人油をつね東山に猿も持物とて行ふも是

此関越を見よとく月の女出立はのいり後世も
て参詣しとく皆衣懐ちの夜も寝此いり
観音さまのいり

四小判をわはる屋柳に見し土人形有

五身の人の立間いれ編み子細のうら

多歩を吊ひり哀や物好の少袖も且即寺のさく人づいと成
無常の月よいり更け又りの種とる
九月にられ晴れやさし最期にの世語も
わ月と浅黄のの少袖の面影見の名は残

巻のマ

一大節季の思ひの周、くし衣の袖に紅有

うらもろもろ美家の銀の毛貫片々たのくし指し布のさき
よけの立りも心の養の障子もひき身とる

こころを

二虫の神鳴りよめるる君は物思ひの新築道有

吹上りの朝月をいづるくち宿りゆく月をいづる
いづれ世もいづれ一昼と夜の国もいと俄に願ひゆく心
てまがまがや

三雪の夜の情は雨の道に似古商人ある

油断のうらみの世の中は殊更見せまじき物道中の肌は金酒の碎
り脇指娘のきこえは栞坊主とていふ事とて後

四世を見せしむるの恨惜をすゝのちて人あり

惜しむべきまれば散りよほるまじき物思ひは卯月の
初つゝ最期をすゝる

五様子方なれば俄坊主前髪に又花の月を哀ある

墨色の袖もあふるるこそとて 取集るる恋は哀れ無常なる

羨みと理ゆか

巻の五

一 つれ吹の笛竹息のちかやうなるを隠るる男有

二 さらさらの命のちかやうに床はわづらふる美衆有

里は夕暮のさかすかに萩葉打落てまじりの雪垣を北窓を寒
き衣のうき音のやうなる

其目のらどなすこのころをいづる水の色は枯帷子に紫の
中幅を下屋弱れし脇差後さきさきと取亂しぬれかけし女の

如し
此身をささげぬ身で携ふきとされしこのころをいづる
の命も有る

三 衆道に両手に散花中刺しゆく女あり

人の身程ありしつれなき物ありし世もよきとて同じ具なる

こゝにけ盛の子やう〜ひ又いす〜 永く契をい龍し妻の
夫死〜哀を見し時〜即座に命を捨んと我れ人々をひ
しの泪の中よ〜る歎とふ物つ〜美の室に心をうつし
あ〜又い身分別〜息引〜うららとせ〜後夫のせ〜
て目〜截其死の弟と直に跡〜ふ〜又二門を以て〜
入嫁取る〜あ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜美理〜ん〜
念仏香花〜人の見〜〜〜三す〜ふ〜を〜
あ〜思〜の落白松枝〜ふ〜油〜〜し〜
ま〜ん〜く〜下着い〜ふ〜せう〜〜無位の小袖目〜
〜〜と〜心〜物〜の〜折〜と〜無常を觀〜け〜
物語のついで〜後を切〜せ〜野〜子〜著〜朝の露を
す〜〜草のうけ〜く〜牛向〜人と〜笹笛旗子〜衣袋取
り〜し〜是〜つ〜ぬ〜者〜ふ〜を〜え〜ん〜が〜い〜〜う〜ら〜歌子〜す〜と〜心

こゝにす〜袖のう〜〜〜女程〜
何〜と〜面〜けた〜人の中〜〜位〜〜
中〜は〜の〜後家〜〜女〜

白情いあら〜〜同〜色〜〜ひら〜多〜布物有
あ〜〜取〜〜移〜の〜世〜心〜の外〜道心

又左銀も朽ち〜〜三百年の鍵〜つ〜男有
い〜〜染〜〜〜〜道〜あ〜〜か〜
〜〜の〜の〜〜〜〜紫〜の〜〜〜身

〜〜

右々客集、貞享三年（百九十九年）の梓弓と上骨
童集、還魂糸料、用楯箱等、五人娘と題して引
作者、其蹟、井原西路著

契
身ヲ散ル後ニ引ク身ヲ相シ朝ノ顔ヲ女ノ男ノ物ヲ
身ヲ散ル後ニ引ク身ヲ相シ朝ノ顔ヲ女ノ男ノ物ヲ

打テ袖ノ者ヲ花ヲ猶身同
待テ暮ル朝ノ顔ヲ女ノ男ノ物ヲ

りし

齊一び夢で毎らん所一び夢を廊らん

先芝花ねきものいりる女よ刀の仁急い見し初見の惚さ

と火の中水の底さしと柱豆腐のりふふふふふふふふふふ

とらいつら見しつら六服をさ回しつら用し薬つらけれそ

所一智よ来て吳れ網のつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつら

らんのおほのふら男でも略言さし流加やよくつらつらつら

くとよつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

柄の香れ何うつらつらつらつらつらつらつらつらつら

いふつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

身軀ははら怪きを好し北海さまへ申物をねえ詩をらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

とらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

軟恩講通事のよから衣の脇の下を膝より袖の下と花
げりし……… 徳者の取けはねは……… 退屈さ
軍書……… 唐を仕替へ所が小
説の點中の西廂記、今や……… 醜の酒………
あつて……… 酒瓶を……… 酒………
あつて……… 筒守……… 所代の書家を………
併按……… 花伴衛……… 中仕………
所………

湖池の法……… 中仕……… 湖池の法……… 藥箱……… 紙衣……… 洗ひ……… 爲者………

五巻の五

……… 湖池の法……… 藥箱……… 紙衣……… 洗ひ……… 爲者……… 湖池の法……… 藥箱……… 紙衣……… 洗ひ……… 爲者……… 湖池の法……… 藥箱……… 紙衣……… 洗ひ……… 爲者………

富家の老の代の前髪とらぬお店先とてむかしとて静しく
子供引と字を以て見し

又世の物下標物とてつけ

ちよとすの物下標物とてつけ
あつたるを尊とすし後れ材料とて人の心とて
てつろ夕鳥の物とてし
又義理母の心とて朝とてし
痛癢の目とてし痛癢とてし
舞うの音とてし始れ九子とてし
頭痛物とてし終向初とてし
さ見酒下戸とてしと救敵とてし
あつたるを勝とてし初對面
釘の物とてしと通とてしと文
離れにとてしと鐘とてしと金とてし
物とてしと道とてしと道とてし
まるとに乳母家根極の經大工

後家の珠数ある夜流きる白前
急ぎたれどふれある觀世
とてしと附とてしとみとてしとた
海川用とてしと庵とてしと年とてしと客
者付子嫁取鳥基の目の西とてし
思ひのる有とてしと初織とてしと又
男にる有とてしとみとてしと古とてし
振向とてしと思のありとてしと人
嫁の智恵知とてしと知の振とてしと聞
取次の女とてしと用とてしとつとてしと
幅柄とてしと物とてしとみとてしととてしと
すりては許家根極の年とてしと借
布とてしとみとてしと葉とてしと実とてしとみ
すしとてしとみとてしと材とてしとみとてしと
拍子とてしと難とてしとつとてしと暁とてしと
うたのす標具極に朝とてしと霜
夜の社とてしと子とてしと物とてしと着とてしと
の~~~~~勝たるとてしと仕立とてしと

又字のりい 甚ぬ 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの
また 三折短冊と 其の皮
鞋の 目く 道 直 其の 弟子

其 親

あつこひ子

かろい ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
そ ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
てん ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

娘

娘 ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

明の鐘

あつこひ子 甚ぬ 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの

高直

檀草の 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの

傾城

ちの 扇の 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの 甚ぬの

初子冊

高直 神仏

ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

ちんりま

つとまをれ神んくちた男いりけりたさうりあしよはのりせ

久す神の上

雲ハるもの一夜のまの月歌くはちい思のせ

景月

夜まをれんくたふくくくくくくくくくくくくくくくくく

あつと見よいりりり

引のく神たりのくく愚痴

後撰夷曲集

短歌

恋歌

海歌

な女即、くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

柳くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

まきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

兒くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

夏くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

下知た、上ド地五の、み海よ、くくくくくくくくくくく

詠くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

秋風、くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くく故に、くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

朝息と、見た名女の、くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

外月くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

見くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

別巻

鳥のうらみはさきさきとあはれとて物ほたす初の袖

友和

題しぬ

あざとくも世はらへし初はるはあはれとて妹心しき

才三味徳意

良因

さうたのうらみとてあはれとてあはれとてあはれとて

宇陀意

海永

あまたなをちをさへしとてあはれとてあはれとてあはれとて

宇陀意

まゆ

おに人作はの初はらへしとてあはれとてあはれとてあはれとて

題不知

川竹

其方とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

悪女とてあはれとて

直好

うらみとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

題しぬ

徳通勝脚

若衆のうらみとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

雑山

未得

男山とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

狐

え信

今んとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

人歌

直徳

このうらみとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

題不知

廣通

癒らさるる月とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

奇待亦懐

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

辞寺

成安

親にや 子にや 跡に 跡に 跡に 跡に 跡に 跡に 跡に 跡に

題不知

常鑑

人の身や 島の雪傳 以上後撰夷曲集也

以上後撰夷曲集也

是紅紫租伯 伯と云ふは其の画家の松平中村也

傾城也 三は傳

京の巻

第一

此の下切りの短し

慈の神の宮に 奥作が

身傳の 名傳 御すまの 御すまの 御すまの

せらふんわ... 傾城... 物に... 仙家の不老不死の妙薬... 命の洗濯遊の... 今更... 命の...

夕暮の上條ありきと仰一表せ伊勢之助といふ浦に
 せんしやうて——母多居の浮きまの梅今程にうきと居る
 ぞとと云、羊の命もあはれ又月見ようとてまふくけの口右
 了やが、首をまはる身代寝は是の里に今語の師をて三人口
 ちとと見ふみこ——此中成つてはまの伊ざん
 の里性具いそつこの因具、鐘も所の鳥居の井一同に深
 中つと噴噴たぢうた——
 面く松様も鯛青踏鳥のやうな浪にびくと、宿でいそ唐末に五斗
 味増とてよふりよ、伽羅の坊屋にまゐる所あつてまゐりと
 里木権く身代に無用の盛とやつて祇家のともおき屋根
 のさむつけを草了り力とて、揚屋の片敷の廣うの狭ふ
 のよのせんく
 其隣におひまをて、白髪様をいそ事たてまゐるとつ

子共たはる布子とてとて、夫が所く袖とてやうとつて
 やうとつてとやうのあはれとつてのと女房、眞んをてとつて
 茶碗茶屋にまゐるぢうた打破の女夫といふ
 かんつ、坊あまう、遣ひあつた分別極多うた、親ら
 女房持、ゆきまに、浮世ひまを、異見す、重手代、近頃
 傾矣す、世思初物とて田か
 ちて女房の松原の園の夜とて、踊えさ、瓢箪の川を、浮た
 うと田か
 何とて具柳、妻命の世、雁下、日和具とてとつて
 今の女房とてとつてとて、見よとて、みたとてとつて、路とてとて
 さや、程の君
 寛原も、次尾、真友の南月とて、つて、程、た、みれ、大勢と
 見よ、神鳴とて、みぢ、みれ

蠟燭を油にたくし、常の如く、さまたけ、けいけい
ついで、即様燦取と、揚屋の男も、勝負の守びも、下りた
まう、といひ、立はらうて、後、つた、甚、所、吸物は、さう、つ、銘
の下、引、女、郎、の、し、ま、び、う、つ、相、し、程、い、色、病、の、ち、い、
くの、情、い、直、あ、ち、あ、し

旧朝の便り、身のうら、ま、れ、科、る、一、門、を、恨、し、何、知、の
町の、痛、無、と、さ、さ、振、舞、の、肘、大、き、積、物、す、い、ま、の、つ、を、信、言、し、ま、
な、り、共、せ、い、ま、い、ま、の、い、ま、い、ま、の、い、ま、い、ま、の、い、ま、い、ま、の、い、ま、い、ま、
な、り、の、有、の、宿、見、に、次、上、の、天、空、浪、く、と、成、あ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
の、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
の、言、葉、の、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、

第三

芝草屋の月の樂

夜、あ、ち、い、た、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
夜、あ、ち、い、た、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
刃、物、と、さ、さ、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
心、底、に、思、ふ、の、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、

舟、橋、の、命、つ、つ、打、つ、つ、太、鼓、村

と、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
物、前、に、借、持、の、方、つ、の、遠、ふ、よ、う、た、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
有、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
あ、つ、つ、高、た、い、ま、の、取、の、ま、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
押、し、つ、つ、つ、つ、間、合、言、の、強、な、ら、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
常、芝、の、芝、寄、威、替、の、さ、さ、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、
九、千、の、ま、い、相、ま、の、松、尾、の、松、の、さ、さ、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、

あふぐ孟軍しるはて且はまは酒をそとせうの中旅をたし
ふるしの酒の胸たさす、いさゝか大酒をちうて
月よもあはる雪に居るもののよはる身の女郎をほめて
申せぬうらひどあつた紅顔あつて昔楊子たはらうそ
とりてて、たあひの白骨をちうて荒言はつた又また席を
すた奪い所へあつた、と思ふてあつた、假の枕たはら
ちうて、那子さす、いさゝか大酒をちうて、女郎の
内心如夜刀とやす、いさゝか大酒をちうて、女郎の
此恨と、いさゝか大酒をちうて、女郎の
まゝ、借銀の内と、さす、いさゝか大酒をちうて、女郎の
同一事たはらう、いさゝか大酒をちうて、女郎の
わらう、格好の施せ、いさゝか大酒をちうて、女郎の
祥ふ、いさゝか大酒をちうて、女郎の

死の、いさゝか大酒をちうて、女郎の
美君と名の、いさゝか大酒をちうて、女郎の
て情の深き、いさゝか大酒をちうて、女郎の
あはる、いさゝか大酒をちうて、女郎の

第五、さし、いさゝか大酒をちうて、女郎の

いさゝか大酒をちうて、女郎の
粹伴の、いさゝか大酒をちうて、女郎の
見所、いさゝか大酒をちうて、女郎の
ハ、いさゝか大酒をちうて、女郎の

いさゝか大酒をちうて、女郎の

社夜の、いさゝか大酒をちうて、女郎の
好の、いさゝか大酒をちうて、女郎の

いさゝか大酒をちうて、女郎の
いさゝか大酒をちうて、女郎の
いさゝか大酒をちうて、女郎の

一や女にちよもいかにと三日月の故げき
一汝のま社の眼
と借るも大夫職と勤をうらむ大夫のよみ羽織と目ざしめ
とすに看取るの胎算用しと一孟にけり
はつるも下心もど、取らむ引よに初下はよ、眼をひき出役た
ふま

うさのちびりつり萬たし物か、酒がち提重
近所ののを誘て、都一家の月見取と、我、中門と見せ
嶋原の南る楊屋の堀の下る、島の中、酒事け
の月見し、ちよもいかにと三日月の故げき
聞え、大耳さく、今、声、ほた山、あつ、ちん
か、か、具、ちよもいかにと三日月の故げき
はつるも、ちよもいかにと三日月の故げき
壱一重のちびりつり萬たし物か、酒がち提重

と下り、ちよもいかにと三日月の故げき
つ、山、あつ、ちん、あつ、ちん、あつ、ちん
た、前、中、看、の、も、録、十五、文、取、の、一、重、箱、た、を、か、つ、た、に
ハ、地、の、ち、よ、も、い、か、に、と、三、日、月、の、故、げ、き、
の、十五、文、取、の、一、重、箱、た、を、か、つ、た、に
あ、女、郎、好、物、の、も、い、か、に、と、三、日、月、の、故、げ、き、
口、柳、の、三、階、の、あ、つ、ちん、あつ、ちん、あつ、ちん、あつ、ちん
高、嶋、原、敷、下、の、ち、よ、も、い、か、に、と、三、日、月、の、故、げ、き、
郎、の、ち、よ、も、い、か、に、と、三、日、月、の、故、げ、き、
ひ、下、り、あ、つ、ちん、あつ、ちん、あつ、ちん、あつ、ちん
の、男、の、ち、よ、も、い、か、に、と、三、日、月、の、故、げ、き、
借、り、あ、つ、ちん、あつ、ちん、あつ、ちん、あつ、ちん

同と云ふは其の居をサハハ迄報にかが足
るを云ふ其の次に此女部の子ありて毎夜銭いふた
こちのいふに替りたる物と云ふは其の昔人の
に聞かざるは物と云ふ太鼓の音に似たりとい
はれて生れつゝ其のいふ異を引のけしむるは其の
いふる自有後家とに思ひつゝとに恨み
せよ扱ふ思ひのいふ人といふは其夜とあり

女音磨の積

式三馬

如所祖所西未意九年面壁ちん入す苦男二年と著を壁と
しし破り身は女一葉のなるをわぬし一盤の川舟の
流るるは真實なる客の身標に不立文字のたふさる
直指心の福やあはれ心はめり隆子先具作成佛のたのほ
か本未々の別は心は年々別法は通と不通とを怪れ
不酔と酔とを柳巷花園尋性紅園ちるは緑意紅
の禅はた通ひのちの香にききとたふさる花にさる
は客のいふの行跡の所羅と唱
音磨の腰に
一物

女音磨

かしほの袖に
かきしほの袖に
かきしほの袖に

ちんまをいひけりてさくと手板を
 親をたままといひてなまのきひ
 此れに道をはかりてきこくちつ
 松原のきねにさつのが景せり
 道よりさつた島田植り
 子とよまるとさつたのきこ
 表事げりてさつてきこくちつ
 夢のさつたまのきとよまると
 願ひて嫁のきとよまるとさつ
 ちつと寝てはげれり嫁のきとよまると
 中のきとよまるとさつたのきとよまると
 けりてさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 どつとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 ちのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 さつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 さつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 まの甲一餅をうけりてきこくちつ

備後之節をさつたのきとよまると
 さつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 敬の客さつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 こゝろまき猫を一ひきつてさつたのきとよまると
 後がいのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 牧をさつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 ちのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 里うまをさつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 鳥子けりてさつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 備了けりてさつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 神鳴りてさつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 大さつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 ちのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 さつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 面をさつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 吳服をさつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると
 駿河甲さつたのきとよまるとさつたのきとよまるとさつたのきとよまると

ひれすもちを厚くする面の皮
言後とらふ女房にありては
持参直ちなぐ柄にうす見
持参直ちなぐ柄にうす見
得るまゝ金さきとて
乳をいひその月を精を
目見しれ母太肌ぬらふもつ
嫉妬のあへんるる裸なり
入智こまわりつてぬるを
て神へ宗頼をさすも習い
とらふもつていひて
うす見とていひていふは
桶の底板で千代社月とて
馬のちりつてのつて俄
つていひていひていひ

作通見しは
敷島の道首うら
秋くはちちの
今朝見しは四五
あの時
うち成の
紆り毛
萬歳にま
桶
室お
魚
門
鳥
さ
杉

日補て何事の御に因らる
秘室のすのたのこつたら
両舎とよで昔事と二はの
産言はくしてス里とや
のひふのめとす。前
破れは五かやてふひ
のよの目見の井と理
つて碎らとひらへ
はな子でうまに
みり。のこつたに親
たり。子賣はたけ
蓮の音たのひら
お龍一ふのひ
けうと先と備膝の上

こころの雷ののひら
いづの魂高き花の
太鼓賣がらつて
姉の髪今日の夕
の夕にまら

時鳥夜用の姉

一兵カカミト入替
みんやひつて有
正言のいた陽
頬はつて女房
度申と翌日
支い蚊帳
相模下女
ちうらみ
さよの
下思
跡下
三は
俗や
百姓
昌度
あや
傾城

うへへの松葉のつらねのつらね
西の海をいよし奥のつらねつ
鬼の首をいよし奥のつらねつ
スズメの親のつらねつらねつらね

卯子酒

はさの巻

第一情のさへ目と忍男

徘徊のつらねつらねつらね
さへ目のつらねつらねつらね
女郎のつらねつらねつらね
下宿のつらねつらねつらね

第二情の格子の吸付煙草

心なき世思の女郎に
煎くつらねつらねつらね
恋のつらねつらねつらね
からつらねつらね

第三情のさへ目と忍男

徘徊のつらねつらねつらね
さへ目のつらねつらねつらね
女郎のつらねつらねつらね
下宿のつらねつらねつらね

第四情の置置は身請存

遠道はつらねつらねつらね
舟の夜のつらねつらねつらね
刃物のつらねつらねつらね
からつらねつらね

第五情のさへ目と忍男

徘徊のつらねつらねつらね
さへ目のつらねつらねつらね
女郎のつらねつらねつらね
下宿のつらねつらねつらね

大坂の巻

第一思のさへ目と忍男

徘徊のつらねつらねつらね
さへ目のつらねつらねつらね
女郎のつらねつらねつらね
下宿のつらねつらねつらね

第二思の類と種物

舟のつらねつらねつらね
舟のつらねつらねつらね
舟のつらねつらねつらね
舟のつらねつらねつらね

第三思のさへ目と忍男

徘徊のつらねつらねつらね
さへ目のつらねつらねつらね
女郎のつらねつらねつらね
下宿のつらねつらねつらね

第四思のさへ目と忍男

徘徊のつらねつらねつらね
さへ目のつらねつらねつらね
女郎のつらねつらねつらね
下宿のつらねつらねつらね

第五思のさへ目と忍男

徘徊のつらねつらねつらね
さへ目のつらねつらねつらね
女郎のつらねつらねつらね
下宿のつらねつらねつらね

死の古語 夏字の偽り

續五代任政其

高元有標

あささうたのしん山見

もくち

いこの山腰のけしむのまにい鬼門に向一室ヶい

旅中花と

霜解

~~~~~ 猫の寝ていさのし 旅に見えはるの白糸

山道のまじたす

文磨

~~~~~ 九族のえたうまのしん けしむのまにい鬼門に向一室ヶい

吉原のまじ

湊千代

~~~~~ ちよ櫻入相のけしむのまにい鬼門に向一室ヶい

心をたし

立川音鳥

~~~~~ いえ間まじとまのしん けしむのまにい鬼門に向一室ヶい

三月のまじ

あし

~~~~~ 芝瓶のしん けしむのまにい鬼門に向一室ヶい

牡丹と

~~~~~ 天にありまのしん けしむのまにい鬼門に向一室ヶい

山

あし

~~~~~ 詩のしん けしむのまにい鬼門に向一室ヶい

杉と藤

~~~~~ 位ちる木のまじとまのしん けしむのまにい鬼門に向一室ヶい

更衣と

玉語り標

~~~~~ 千屋のまじとまのしん けしむのまにい鬼門に向一室ヶい

一

高元有

~~~~~ 綿の腸ちる木のまじとまのしん けしむのまにい鬼門に向一室ヶい

五月雨と

糸

~~~~~ 十のまじとまのしん けしむのまにい鬼門に向一室ヶい

五月雨と

女子

面辭のす禪豆に...  
改遺大と

白扇と...  
改遺大

西国納涼

国より...  
七夕

...  
庄道了得

福事と  
倭教雅真

稿書の光の袖の切方にてやのころは...

冬...  
梅

言高大針と...  
題

先生の...  
の中甫と

稿書の書名の定の見...  
梅

莫不句集

梅...  
柳

猫の窓  
去雨  
海苔  
燕  
蝶  
紫花  
花  
洛陽  
獨

かみ持の尾に控へし猫の窓  
去のあを理にさす夜夜  
此の朝夕をすし海苔に  
青苔をさす白く磯の空  
とくさす花をさす燕  
初らん舎や花の飛出蝶  
植木の置りし胡蝶  
あはれわたりの女和舟  
楓さす中の花をさす秋  
ふりくる女のさす花  
手たしす花の西の  
午さす花の初  
ふりさす花の初  
ふりさす花の初

若船  
藤  
川  
更衣  
自  
杜  
短  
夜  
初

若船の少力舟道  
藤のさす花の初  
川のさす花の初  
更衣のさす花の初  
自のさす花の初  
杜のさす花の初  
短のさす花の初  
夜のさす花の初  
初のさす花の初

受 鮓 晒 合 裾 毛 衣 衣 衣 衣 衣  
唐 廊 中 秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋  
字 子 院 院 院 院 院 院 院 院

遠くまで息を吐くほど  
さうして世に鮓一夜暮るまで  
皮を剥くやうにやうやく  
山に上る女の子は  
物の中にもうたふは  
定まらぬ心もわづらひ  
ひびくはのれまも都の  
人生たもあまのこころ  
殿は言はぬまもあま  
うすはあまのこころ  
十はあまのこころ  
道多きはあまのこころ  
傾城のまもあまのこころ

良夜 名月 相標 夜冥 新為 唐 時雨 山

のらまのあまのこころ  
うすはあまのこころ  
名はあまのこころ  
名月あまのこころ  
方内あまのこころ  
秋はあまのこころ  
四つあまのこころ  
針はあまのこころ  
うすはあまのこころ  
又まのあまのこころ

冬牡丹  
移竹  
片楮  
岸  
千鳥  
雪

冬牡丹の影を  
年の友の影を  
移竹の道に  
片楮の道に  
岸の道に  
千鳥の道に  
雪の道に

長唄

菘入娘

行成六郎

菘入娘の影を  
行成六郎の影を  
冬牡丹の影を  
年の友の影を  
移竹の影を  
片楮の影を  
岸の影を  
千鳥の影を  
雪の影を

冬牡丹の影を  
年の友の影を  
移竹の影を  
片楮の影を  
岸の影を  
千鳥の影を  
雪の影を  
菘入娘の影を  
行成六郎の影を  
冬牡丹の影を  
年の友の影を  
移竹の影を  
片楮の影を  
岸の影を  
千鳥の影を  
雪の影を

の西右袖のしりしり後車に夜の梅月を移香の云譯聞  
は聞初にらるる梅のを一重園の七重八重のつと山路の  
旭日梅月を右初郵公此處につとる多高屋の柳を  
四の心せまうして

浦嶋の帰帆のうらみ  
二首

引ひ船多の山妻顔の傍の亭にたうらみか佐良は漂ひて  
色づの密衣首尾の鳴きの灘にそつ移湯まぐ女のそとま  
も逢そはつりし顔紅糸散り討の裏へ入ほまをうらみか  
むつら

夕

松木積むお色のく運をささる石原のくしんしん鳥帽子つ  
衣着つ馴れりし後とらうらみ浦風たゆみうらみ  
白浪たゆみ浦下せを送りうらみ此文の梅ももつら

人また袖をうらみ何膝のうらみうらみ瀬し君乃ち誰の  
つら御うらみうらみ夕と波うらみうらみ見ぬ月我備たあ  
是乃月のかるる月二影うらみ是やうらみそよのうら  
鳴きの初は月をうらみ休みのぬき鳥か面巾慣れ  
了し須ち夕たぬぬる船のちうらみしはを蹴まなう  
うらみは乃千鳥のうらみうらみうらみうらみうらみうら  
塩屋の櫻うらみ立名りしうらみうらみうらみの浦の行  
うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみうら  
うらみやうらみうらみ今休れぬ初うらみうらみうら  
うらみの帯うらみうらみうらみうらみの裾うらみうら  
うらみの心うらみうらみの鳥のうらみやうらみうら  
うらみうらみの行うらみうらみの約書うらみうら  
うらみうらみうらみうらみうらみうらみうらみうら



身はうらぎにせし目も今ちと身をば下指し  
其日午また長柄のしをこししを  
しほりのよぶた標を今と相合今のままをせしん  
んよつすなり今と云はし思ひ同はな今しは  
しや。暇申ししるはのよのすの浦ありし西と聞  
はしはの松風はるをのしん人のさし世に残らん  
むし西を并錦のうらた

道は別れし後を今朝のよのしりきしち

月の巻 時代は秋のまじり 月雲は静儀の居 五文

... 思ふ清の清も路も陽の夜もたを金の薄墨たを玉  
音と誰がし楓やるを社殿の錦をのまを流るる五田  
井すづしるる朝鳥のさるよのもつれ魚のたをさるる

舞扇及び杖のさるる思ひし何をしんかの新のほろもた  
つし振るる薄の雲のさるるはげしき草花たをらわ  
ふし樹をさるるしんをこし世し看のさるるた長柄の杖の妹  
清がらつししんを今を今も今も今も今も今も今も  
夢の君つらつしとせし世のさるるしんを今も今も今も  
賦の遠結、井のふつ特のなつサツとつら、国を今も今も  
卯のさるるらつしんを今も今も今も今も今も今も今も  
まららるるらつしんを今も今も今も今も今も今も今も

私策神童

... 君の清のまじり 霞の契を重菊しし可霞の妹の  
さるるはのすす鏡のま恋よし馬のたを今も今も今も  
てま白菊の玉萬、人目の園の結を今も今も今も今も  
片、深きまを徳菊の丁のけらるの便と使し菊のまはるるに



て風下はほのいづかき梅は枝のさむき花をくみり詠を尽せ  
あつちかき

ま廣

君の裁長まのたききりし酒ゆく程ゆきし百葉  
の長方ぶまの宇船は海は風かさるる先如夢に富せ  
阿音扇のま扇もさきづき音流し石の魚下りくまはに  
とつちかきくうのゆきし物くわのきむをさむのこり  
糸の秋に露きよきはるに散るのよる月し  
雲とよ風は盛草のきよきあつちかき人目たき  
とよき其まの月のゆきしたまのゆきし  
ゆきし月のゆきしたまのゆきし  
ゆきし月のゆきしたまのゆきし  
の口にたのききえりり其のまゆきしたまのゆきし

く昔人宿り扇のせがきりつちかき  
とよき

八羽梅は豊潤

月ひのゆきし花をさく夜中へ涙の夢をきり  
身やかさの思ひをきり

たねまゝの面和俱啼跡 遠棲主人

魚の餌りきり針をきり遊戯は魚行きて雲  
ていりきり通ふきり悉皆盡し神のこ助通のきり  
回をは怒り友物うちりきり魚一魚のきり  
サをゆきまきり魚をきり今に細眼を  
いづい藤のさき高ききり魚城の石垣は雪  
く羽のさきをきりて笑ふ魚字は酒に微酔のきり

この船は、まゝにりたあつた  
このまゝのまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた

傾城艦の序

この船は、まゝにりたあつた  
このまゝのまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた

この船は、まゝにりたあつた  
このまゝのまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた

傾城艦の序

この船は、まゝにりたあつた  
このまゝのまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた

この船は、まゝにりたあつた  
このまゝのまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた  
君のまゝにりたあつた

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style with some larger characters interspersed. The page is numbered '12' at the bottom right.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is dense and fills most of the page. The page is numbered '13' at the bottom right.

風俗文集

自隨落先と 北華

養子基之序

世に位いふ水車のごとく動くしゆるるる多く手早に月を  
なき時ちる百た夢百の世話替りまきし物なる暇はし  
今世を捨てて去りて無名の境に遊ぶとてつたまに一物を  
そ多と枕とふ世を捨てて天宮と加ふる時、神、慎と体  
伸てごうらふとく、慮のあらむは、ま、あ、は、枕とて、  
く、捨、枕、の、マ、ソ、ウ、ウ、ウ、津、関、の、恨、尽、ぶ、長、枕、の、油、垢、を、併、考、の  
や、い、深、一、文、枕、傾、城、買、の、奉、り、引、け、一、枕、藪、匠、者、の、物、好  
旅、童、や、の、横、切、枕、の、旅、人、の、草、野、を、直、一、や、女、の、手、枕、の、つ、  
ち、る、契、と、い、ふ、の、胎、枕、の、よ、り、一、物、知、の、上、也、却、耶、の、枕、の、  
慮、生、の、高、相、を、慮、し、結、枕、の、故、を、辞、一、夜、の、灯、の、代、を、遊、仙、の、う、  
枕、を、以、て、見、物、の、景、を、見、つ、つ、の、枕、を、く、ぶ、ら、ま、ち、の、枕、を、く、

九月の昼毎に二龍枕の涼、一或、張、枕、を、く、枕、つ、つ、の、洞  
者、祖、枕、を、く、枕、指、枕、十、品、其、く、く、一、語、以、と、目、を、な、れ、  
い、ち、と、枕、の、汝、の、我、の、是、の、く、く、の、信、を、知、り、  
也、一、枕、の、睡、の、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、  
汝、が、ち、づ、ら、の、所、を、あ、ら、い、し、一、世、罪、と、衆、の、汝、の、不、仕、左、つ、  
う、ら、一、世、の、罪、を、あ、ら、い、し、一、西、の、夜、驚、奮、の、つ、  
の、く、く、一、翼、の、床、の、上、親、子、の、徳、を、と、汝、の、く、く、  
世、の、罪、を、あ、ら、い、し、一、時、の、あ、ら、い、し、一、世、の、罪、を、あ、ら、  
の、く、く、一、引、と、つ、一、一、油、子、指、枕、を、一、只、あ、ら、  
者、の、下、目、の、事、を、一、世、の、罪、を、あ、ら、い、し、  
と、一、子、指、枕、の、名、を、と、卷、と、一、一、一、一、一、  
是、を、以、て、油、の、名、を、と、卷、と、一、一、且、由、は、戒、り、  
面、を、子、指、枕、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

名はよき見たりと云ふに大車 盗賊もい早く言ふ其言  
いけりしと云ふをわく人ユ語るるべし

〜甘茶松の道〜

萬に寄致方々物いひきり〜煙草のわ人いひ  
淋かたつちき心ばをする食出のうらむと煙草を茶の  
わらま〜煙草の火い〜客入〜ま〜  
一言二言の〜一ちの手ま〜あ〜ま〜  
原入り煙草盆罷り〜其功中飽時〜  
時飽〜煙草のうら〜煙草と女〜遊女の扱  
ま〜の扱〜又端の朝横を〜行〜山反  
海近くわわ〜商〜火属〜せ  
又〜職人の体身〜煙草原と名付〜程  
〜煙草吸〜行〜此の〜

西顔月夜

常盤は文字又夫直付  
西補 木村えん

高〜梅のは見月目見初と手つ〜見念す種  
と顔〜優形〜由〜人の用  
髪々の其清人下見〜目老〜業平〜  
月びやせ〜物〜心で〜  
の積〜て〜娘と梅の色競〜離遊びの〜  
耻〜孟〜  
〜飲〜其喜〜  
抱〜手杖の〜直〜  
〜積〜物〜知〜  
〜物何の〜

遠中車初まの旅

夜林 久助

さしをよ今いぢるれば此致〜の腔言まらうと調  
て浮きをまて〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ  
よのく〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ  
ま麻手

二申し浮き方の鮫靴

おまき

今宵伊とつめ〜鐘に身とて目のまぢ

〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ

〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ

〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ

香紋日雛形

淡川女

此のくさの心で底と〜ぬま〜井のまぢは梅もぢるまぢ  
〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ

くさの梅

香紋日雛形

淡川女

以長家の〜の愛相をば付〜のむ〜し  
〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ

命慈きの二有目

左ニ

色た〜の角力〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ  
〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ

〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ  
〜あつる影の神とて佛たぢるまぢ



此物の中は言ふ心くく「不愛り男のまがすりや梅の五  
 手」のささげの盆手に「あな幸に幸に幸の久きくく  
 酒より言ひつゝあつらふらふのべらり酔ふさ  
 いさくさのささげの縁のな  
 其の旅路の嫁入  
 櫻田 治助  
 金にのり道中「双の年白きよ」目まの朝

世間娘言書 一之巻

男と尻に金に城光娘

女鳥のあつらひ両合羽着て見せのを見し神  
 裾の台まのちかきくげ肌くい瀬の里木書  
 疾の馳走言がゆづりくらくら  
 大神 其の御子まつてある

行古ハ律多<sup>千</sup>カカ<sup>カ</sup>と人の娘言書とすはるる近き一人の  
 娘内保<sup>○</sup>とせとて「あな」<sup>〽</sup>傾城柱女其長<sup>〽</sup>の女形のちり  
 こまがうつ「あな」<sup>〽</sup>傾城柱女其長<sup>〽</sup>の女形のちり  
 第一して男のすまの袖あらく居得<sup>〽</sup>の道中  
 初めに初作にせたる人の見ふくや大事<sup>〽</sup>けはは箱  
 生にけし痛とくく「正首の子まて梅長<sup>〽</sup>の口  
 の大いあつらひにすばあ「いひ物と」<sup>〽</sup>のささ  
 せ安とする「今時の女ぞう」<sup>〽</sup>つれは男のさ<sup>〽</sup>甚思<sup>〽</sup>鼻  
 のさの内「と」<sup>〽</sup>摩<sup>〽</sup>とらけすのさ「のさ」<sup>〽</sup>の首助  
 のさ「と」<sup>〽</sup>産毛とを梅きりてさみ<sup>〽</sup>のさ「のさ」<sup>〽</sup>  
 柝原見ま<sup>〽</sup>具<sup>〽</sup>初に上とするぶ下とす「のさ」<sup>〽</sup>の瞬え  
 中「疾」<sup>〽</sup>のふに「酌」<sup>〽</sup>の跡あ<sup>〽</sup>飯<sup>〽</sup>椀<sup>〽</sup>「のさ」<sup>〽</sup>のさ「のさ」<sup>〽</sup>  
 初<sup>〽</sup>か<sup>〽</sup>とち<sup>〽</sup>を<sup>〽</sup>顔<sup>〽</sup>を<sup>〽</sup>す<sup>〽</sup>ち<sup>〽</sup>が<sup>〽</sup>ば<sup>〽</sup>ん<sup>〽</sup>の<sup>〽</sup>さ<sup>〽</sup>の<sup>〽</sup>さ<sup>〽</sup>も<sup>〽</sup>と<sup>〽</sup>り<sup>〽</sup>て<sup>〽</sup>茶



大和國草屋村

鳥の陰に似る歌

山崎の鳥

系

鳥の陰に似る歌

海苔

海苔の歌

雑子

雑子の歌

掛

掛の歌

杜宇

杜宇の歌

五月雨

五月雨の歌

初真菜の歌  
鳥の陰に似る歌  
海苔の歌  
雑子の歌  
掛の歌  
杜宇の歌  
五月雨の歌

教をうけ鼻が張るやうに涼

廊節用致

鶏後亭半後

世に早引取用りたるものなり大抵其書と関するに大屋店子の代書に様々張義が信物で塗りけ文徳子の贈答のつらと秘し通衡の擬す此廊節月の書は頗る是より男子して専ら放蕩家の監戒を備ふべしとあるは則ちの所は散りふまの姿で是は財安が臨安の中の趣と慕い雪の上の踏を憐れむといふ所の角をいふことと頗るは申君が珠履に控えんと欲は是ら切落しを避故りてそのこと親の心最憐れ可憐の千言万語の色即是方の方便説貪嗔癡の三蒲団は此摩が字もあはれむに後方に方々よらばべしと綴りしんれ

女室に隨一はるの釵髪男山のまどとつら馬字是直と黄面と老子が歎息とら白柳屋が嘗て盡徳品寧ろ傾城界の果いふくくも此之人の母の子に謝んやとら経待百卷のくま編は一箇紙此冊作されしとら了らて諸君子に文軒の解嘲をばけしとらと三雨

青雉日記序 (寛和三年)

白陽東魚

唐辛の色はあつちと蒼く食て初て其くまをとり懼威の顔の艶いりて是を置て後子傳をまをさる蓋其辛をとりて心ゆく食其傳を置居て置かた何を溺れ甚しきたそんまをとりては清りやすき此道くまを甘虎の咬後日まをとりては清いあつち色好をせたにみずと過らせのしうらお福の百の媚茶をいふる



且と土まゝのいふ母に梯のの尻材のせりの母のりく  
早のよのち くと 正月のまをとりて  
うまはれ尻でせうとやうと音に又阿のまを

狂歌上段集

元日

二院野法師

まゝ今生のゆさうらうら 梅のしらまのまをけりて  
大佛れりうらにけい風の香を鼻にぬりて梅のまを  
一存れ梅のまをけりて西のうらまをけりて

子と月

故魚高のな

まゝ今生のまのまの月をうらまをけりて

千一宮カ果

やまのうらまのまをけりてゆれのまをけりて

窪俊満

警甲れりうらまのまをけりて月梅れ髪をけりて

相長村

和庭の目貫に植 白りてまの北馬の極をけりて

高根雪風

を引ねりてのまをけりてまをけりて

向 左 堂

まゝ今生のまのまのまをけりて

何れい草か 初嵐 玉苗の 夏の日 人並 草貫

そくの夏の 煙草 古後 早丸

おとろけ 早苗 産後 満

今宵に 早苗の 水巻 百姓

田に 夕立 玉苗の 黄い

夕立の 果を 鱈魚の 汁の 葛 風

ふり 里 髪 出 夕立 何れ 何れ

初嵐

玉 草丸

秋に 夕立の 如く 初嵐

何れは 草 枝柑子 芝草

黄と白の 氷 窪 依備

寒き 日 陰山 奥位

ついで 鬼 一カ行 救世

大江 草 野 久 赤松 産後

旅人の心づくる宿のたけのけし枝葉下り  
兼原 百成

うらうらのあやし 大杉相合の葉の  
清くしりて  
長樹

其うと思ふ余りまは袖のたけ此世をのりける  
ふと

清くしりて朝露まはす秋の移りあはる風の北枝  
懐旧 空風

世の中なるまはる風の車よのまをいひ  
秋 一本

清くしりて人のいひ世をいひしをいひしをいひし  
桐 長樹

世をいひしをいひしをいひしをいひしをいひし  
世をいひしをいひしをいひしをいひしをいひし

女枝 神植

音草のたけのけし枝のたけのけし  
兼原 笛林

うらうらのあやし 大杉相合の葉の  
兼原 近江

其うと思ふ余りまは袖のたけ此世をのりける  
兼原 近江

清くしりて朝露まはす秋の移りあはる風の北枝  
兼原 近江

世の中なるまはる風の車よのまをいひ  
兼原 近江

清くしりて人のいひ世をいひしをいひしをいひし  
兼原 近江

世をいひしをいひしをいひしをいひしをいひし  
兼原 近江

神紙

72



夢采

三法師

地震をいふまゝに此般れ程をいふ所新篇集

西の志

園 記 録

ついでにすゝめをいふ今もやいふらうし不二是西行

籬

書根 雪風

樟松の園をいふは御祖のけらつ備に其のまゝに

常陽庵 光

のち棚の玉をいふは何と云ふ風下砂碓のくさるる

年尾 古近

大けり御とていふは前も供物に飛つ猫は守に

伊豆平 子別

うはしりまのりか程をいふはまのりまのりいふまのり

權佛

三陰 龍法師

うらみ茶をいふは社まゝのた 新氏、まのり西堂

海草 古近

黄金たれをいふは仙の脇証のよらう

時々

地

かたつたつたをいふはを固むる 鯉、牛の角をいふは

一夜 鮎

年尾 古近

鮎をいふは鮎にさういふは海をいふは

坂上 古近

松浦守りたつて自らいふは鮎にさういふは石の地

端年

園 古近

波をいふは鬼とていふは初織をいふは鯉にさういふは

書根 雪風

いふはいふはいふはいふは合せしめをいふは

虫干

物事 喜也

かゝるもよまじくとも女古染に通ずる風のふは是るこ

山東 亭

紫とちけとをこらちひ紙の君子の風と虫干やす

徳山 奥信

こつまもたうけし神のまらちのあひくつ後たふしはる

徳山 風林

冷ゆるまの模様風の風柳の揺らぐつら

十二月庵主人

まゝら途やころころと持たにちくく月風の風をく

荏 羽衣

あきまひのまじりぬく蓮葉た飾りり馬場あのみつ

葉初亭年武

盆踊

秋風のしらあつらふ都亭の十軒せくちをあらう

麻つりの真顔

音路とら少所踊のふけうせ伊勢のまのうの上る

尚右堂 後篇

ハ初を文場すし白ちの雲をまのて籠るちうひる

長

こゝれましし神の五つ六のふらふらさし

瑞琴 唐信

光信とつらうちのちのちのちのちのちのちのちのち

門 ね

けらちの形はのちのちのちのちのちのちのちのち

月は母是

月の名はいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

夷講

張るる妻の腰くつけとる一枚は後の朝のうら

かゆき ちよりの真顔 物悲 花丸

顔見世

うふせの周のまをさるるあはれのゆめまのうすの笠帽

何胸汁

ふと汁まゝ吸くと思ひきる余の色や夜の舟

初鰯

唐下れもいふおれ油に心こころいふ人いふを魚

杉夜文庫の序

狂歌堂真顔

物よのやうな腰ははは紫ニ女の晴江を看する 藤徳の

勢をよ李王両家の朝のまを無垢をいひのけを白氏の白きを  
てて面をよいほい四方のちよちよて腰まをいふ形を  
照るよ本朝文鑑のうらめしき腰をいふよ風信文選た  
いふに肝をいふ錦浦の白をいふのうらめし  
うらめし自直後をいふにさるる狂歌をいふ  
まのいかに荷の古ゆめまをいふ染をいふ由の並好に  
道調の西舟の匡衡がけはいりくくく二あを下らうり  
実にはつらげ就漫章 永く後代手に伝はるるの  
まをいふよ

杉夜文庫

百鳥賦

鶴の葦盧連子らしに居る景物れ最上るる 藪を長

赤松 金鶏著

濱の波を徳を喜みの杉よとて此島をさびて  
つうつういひ唐の子英い喜物とて瀛洲とてわが朝  
の朝比那の之はとて鐘倉子朝との画所れ日の出に  
ゆききよの鶴朝日を青いひるの如く見えて  
蓬萊山を舞雀のつるに角の身え東嶽山の鶴吉  
いと四つた其い清の岡り原右府の祈願所とて  
の子餅の本所とてさるる一室の清の夜此賦のまをり  
やわらひりれ女窟の聲を井に千仞の敷とてさるる  
といひてさるるに子とてさるる夜市の一書といふ  
さるるや  
牛さまの一室の清の夜此賦のまをり  
水よりや一室の清の夜此賦のまをり  
さるるに親の如くさるる

いれ物人のいれ物に實美のあまり月雪さるる  
さるるに待の言のいれ物に時馬とてさるる  
飯の善切のまをりさるるに  
さるるに  
借のつて和歌の由度らに本店の種とてさるる  
さるるに五月雨のさるるに徳大士の驥尾  
木家のいれ物にさるるに  
普清のさるるに  
麻の糸のいれ物にさるるに  
二かた一夜のいれ物に家とてさるるに  
世の類のさるるに  
さるるに

くちかきづくのちの輩うらまうしつらつら心柳を切つて論せし  
尾いづつま羽の雛形を是れ

白踏を雪まきし一待はりせりさきづつは是を待ど田中  
こき徳利と見せしは併務原をゆるし

いすの何にははらりしとく人の子らたしとちうしと  
やまの人のつとやうなるまきの人のまら真なり疾し

まはりし  
除草は隠者懸れしとまらるるえ政をまづすまはりし

よふは海をぬえ政と勢と相持の隠所をくえ政いづもの  
よまらるるしつと勢いえ政のつとまらるるしつと

鳴鈴の声色の實理まらるる木兔のまらやうなるい四方  
山一まらるる

柳を鳥の飄し手として静勝の柳を

鳴の燈馬あつてまらやまらつてあまらるる何のまらり

祐まらるる名代まらるるまらり今らるるまらるるまらるる

賞院まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

山鳥の尾のまらるる百人一首まのせらるる鳥の勝のまらるる在間が

まらるるまらるる一徳人のオルマ

尾長鳥の尾のまらるる目白のまらるるまらるる尾の尾のまらるる  
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる  
直務まらるる



大で豆はさしとふ其後日本州家ハエ

鷹の吐きの言を象をせじ執り勇猛の客点と兼り

ふとさる鳥の河き名ふうりて後のせよを

つるねんふらね

鶺鴒の暈つきのネとらると夜しをの舟大子思ひをか

つるいふれ由良兵庫の妻信仰後の雪娘にりつ

いつ一悟しはくも

さるい漆物のよたにまぶ色のるるうづり

宿つりの美稱とまむ鳥の道指の鐘にまきま

鶺鴒の銀治所れ鯉をりるまきまに遊取のまた踏

またさるい調やれまた

蝙蝠の覚たりりて虚やと飛ちるく藍より

藍より

目ざしり業るし時珍が綱目の説に年経るとまを

寺まらんとし何とすま此まこのるらう

山まらんとし何とすま此まこのるらう

て大き太の如くと時珍が説を

俳諧はま

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

ゆのぐさういさる物や園の舟

海原より  
館の物

一物や... 佛...  
白山... 枝...  
散る梅... 暮の大...  
結衣... 暈の障子...  
夕陽... 夕陽の好も...  
人... 世... 暮...  
盆... 佛の... 回...

風塵  
世は  
真室  
梅角  
浮糸  
路水  
竹松  
魚  
極々  
山  
真信  
留月

受難十七  
回三三  
甲かき  
府かき

柳雪や... 佛と... 二年忌  
今具に... 秋す...  
衣更... 暮...  
君是... 初子...  
卒... 風狂...  
女... 何... 年...  
地... 胡...  
毎... 年...  
一...

春狐  
東雪  
浄紙  
其角  
園女  
季竹  
宵重  
梅角  
梅角  
衿空  
其角  
蒼狐  
破



扇獲  
扇獲の香や  
あやめいふまはる香ぶ  
之女  
弓姫  
仰ぐ山より  
らけり  
昌房

風俗文集 下巻

自隨落生 北單

船山靈之禮

臘月のさし梅が香を吹送る風のそよそよと流  
せぬまはるりあつたにまはるりつとあつた棹を舟より  
海方の社業の釣舟の舟の舟とつとつと舟を運ぶた  
らぬらちとつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
の舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
山大姥つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた

てつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた  
つとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶつとつと舟を運ぶた

市中に辨

市中に辨  
市中に辨  
市中に辨  
市中に辨  
市中に辨  
市中に辨  
市中に辨  
市中に辨  
市中に辨  
市中に辨



子にいつかの富を碎と確しけり 臘豆腐の味くものりく  
真に任の目あり一玉の汁はぬ豆腐の暑をさるる秋の  
月しに多ありどお多きとくさの雪の湯の豆腐の寒  
としくぐ又葉の餌のみより由樂の風味を長茶の根  
わくせうのいましあつて或は吉人の坂にけりてい敷の  
色は豆腐と呼して定家師の倉山よりあつて  
鎌倉曲の身持の由樂の好者と聞えり神田より  
唐より孔心と云ふ一の味と張るい孟豆腐の趣向  
の琴の名も豆腐車といふものありと千早振  
神の御園とてゆき神の後世願うと神田の  
南禅の豆腐を待つてか揚豆腐の少僧が鼻を  
ひらきせすてくつとせ豆腐の喜の歌  
豆腐の能くゆきく寒の且豆腐の好む人の

好物干しころくせりてくわたり不鮮不代く枝の葉  
味を賤すく徳ありく賞すくまよのり

良法庭訓結果

一の巻 東西

自居 之 甚

序開 柳年のくさるる形續の古長

序中 幸甚しく身法の相傳

相傳其後を動形不富に傳り  
とく不者ありては道無のま  
く者といひて  
善法不傳言く却る法の身  
法の代五百五物と身とく  
ていつく家元の富

席の切

ソノヤウに申すに、世の凶文  
秋のやうに打つて敵の  
無くのりと油断する世の凶文の  
本を打つてくる所國の若子

二之巻

道り

東西  
田のやうに申すに、女親の敵打

二の中

十九年未の敵より来たつちとる  
身の上の、後ろ立ちと申すに、  
やうに申すに、後ろ立ちと申すに、  
奉りの中、初め、百五の里付  
佛のよんで地獄よりと食の  
の、狼藉といふ世をの、  
子、野、計、男、大、心、付、  
不、富、千、万、の、生、食、の、昔、  
こゝろ、に、縁、を、初、對、面、し、病、の、

二のや

み飽やうに申すに、けの、  
ア、後、の、

三之巻

東西

三のロ

殆、赤、面、の、や、う、に、  
く、ま、い、置、つ、る、ま、  
研、み、あ、ま、あ、る、  
せ、ら、う、い、う、と、  
曲、り、

三の中

異、解、の、  
ア、ん、ら、う、く、い、  
研、み、あ、ま、あ、る、  
せ、ら、う、い、う、と、  
曲、り、

三の切

逢ふ親子を子に離るるを  
一夜のちきりといふは  
思ふに  
思ふに

四之巻 東西

一の巻

己守り道 浪人の切腹  
敵を討つる敵を討つる  
乃の昔由 又復す切腹  
是非のまゝ今の 勇まゝ

二の巻

中 後長之 親子の恋  
狂舞のつらぬ切腹の後  
もふまゝの代なごの  
杉宮が竹のこゝろ 斬る

三の巻

己守り道 浪人の切腹  
思ふに 思ふに

女房とらふ子なふあはれて  
おれいこつて 雲のわらわ

五之巻 東西

四の巻

毛を吹く 疵をぬき 目元の腰力  
首尾をうらつて くらゐの疵  
兼仕ぢりせし くらゐの  
まゝの 本行はの武さ

五の巻

堅原早とけ 善悪の如く  
ね又う前甥が 草末の  
ぬす伊小相重 ぬす  
まゝやん 右のけ

六の巻

骨を食ふ くらゐの 骨の  
鯨波とす くらゐの 骨

切狂言の末の巻  
切狂言の末の巻  
切狂言の末の巻

妻恋三の目

任事不極す 羅山

くは井の世の人なりふれ

わづら音律をこころの事ふ

玉津宮不極す 智由の内侍

仲夏山真麗世のちうみ

たのふすはむとらうのす

又在不極す 女けり香江

たは姫のあいらけり山の

あいらけり山の

丁巳年十一月  
自山